

「SHUMOKU GALLERY Pop Up@MAHO KUBOTA」のご案内

KUNIAKI YAMAMURA
HIROYUKI SUZUKI
SAYAKO KISHIMOTO
SHUSAKU ARAKAWA
KOTARO MIGISHI
NATSUYUKI NAKANISHI

< 展覧会概要 >

展覧会名 「SHUMOKU GALLERY Pop Up@MAHO KUBOTA」
展覧会会期 2019年4月12日（金）-5月11日（土）
12:00-7:00pm
日・月および祝日は休廊。*4/28（日）-5/6（月）は休廊となります。
入場無料
会場 MAHO KUBOTA GALLERY
東京都渋谷区神宮前 2-4-7 1F tel 03-6434-7716
<http://www.mahokubota.com>

MAHO KUBOTA GALLERY では4月12日より名古屋のSHUMOKU GALLERYを招いてPOP UP展覧会「SHUMOKU GALLERY Pop Up@MAHO KUBOTA」を開催いたします。SHUMOKU GALLERY所属のアーティスト、山村國晶、鈴木広行、岸本清子に加え、名古屋にゆかりのある荒川修作、三岸好太郎および、この二人のアーティストの流れからつながる中西夏之のコラージュ作品を展示いたします。

SHUMOKU GALLERYのキュレーションによるこの展覧会は、はからずも名古屋の地で短い生涯を終えることとなった日本のモダニズム絵画を代表する画家の三岸好太郎と、名古屋出身の現代美術家であった荒川修作の初期の作品の中に見られるシュルレアリスムの影響に着目し、さらにそこから中西夏之の謎めいたダイアグラムの作品へと視点を展開してゆきます。また、荒川修作や赤瀬川原平とほぼ同時期に愛知県立旭ヶ丘高校の美術科に在籍し、のちに東京で彼らとともにネオダダオルガナイザーズのメンバーのひとりとして

活動した岸本清子が残した蠱惑的なペインティングの謎解きに挑みながら、SHUMOKU GALLERY の所属作家で旭ヶ丘高校では岸本の2年後輩あたり、現在も精力的に制作を続ける山村國晶の60年代と80年代の作品、そして過去にはNYにて荒川の版画制作を支えた経験のある鈴木広行による独自の方法論と概念によるモノクロームの作品を展示いたします。

山村國晶 (1942-)

1942年名古屋生まれ。愛知県立旭丘高等学校美術科卒業、1966年武蔵野美術大学卒業。大学在学中より、池田満寿夫のアトリエで銅版画を制作する一方で、当時南画廊で展示していたアメリカ現代美術に影響を受けた作品を制作する。1966年名古屋の桜画廊で初個展。1967年第四回国際青年美術家展「日本・アメリカ展」出品。1970年代後半より単一の鍵型のようなフォルムに到達して以降、独自のミニマルな図形を繰り返すペインティングを発表し続けている。初期より現在に至るまで一貫して、下書きをせず細い筆を用いてフリーに形をつないでいき長い時間をかけ幾重にも色を塗り重ねて画面を完成させる画法を貫いている。

鈴木広行 (1950-)

1950年刈谷市生まれ。篠田守男、三木富雄のアトリエで助手を勤め、金属について興味を持ち銅版画を始める。1973年に渡仏。77年までW・S・ヘイターのアトリエ17で版画技法を学んでいる。1974年、フランスでのプロワ国際美術展を皮切りに各地の版画ビエンナーレに作品を出品する一方で、名古屋のギャラリーたかぎをメインギャラリーとして定期的に作品を発表している。1982年、荒川修作の版画制作に協力するために渡米。約1年半の間、荒川修作とともに作品制作を行い、その制作姿勢に強い影響を受ける。帰国後も引き続き、銅版画制作を続ける一方、紙に様々な素材を用いたドローイング作品の制作を開始する。以降、エッチングやモノタイプ作品を中心に制作を続けている。

岸本清子 (1939-1988)

1939年名古屋市に生まれ、愛知県立旭丘高校美術科に入学し同校先輩である赤瀬川原平や荒川修作と関わりを持つ。1960年「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」結成時に参加、篠原有司男、吉村益信ら創立メンバーの中で唯一の女性作家として活動する。1979年に名古屋に活動の場所を移し、その後もパフォーマンスや10m以上に及ぶダイナミックな絵画の制作に取り組む。没後、作品は大分市美術館、金沢21世紀美術館、宮城県立美術館、名古屋市美術館などに所蔵されている。2017年、SHUMOKU GALLERYにて「岸本清子 RETROSPECTIVE」を開催。

荒川修作 (1936-2010)

1936年名古屋生まれ。愛知県立旭丘高等学校美術科卒業、武蔵野美術学校中退。1960年2月ネオダダ・オルガナイザーズの一人として読売アンデパンダン展で作品を発表したのち、同年9月に脱退。その後1961年に渡米し以後ニューヨークで制作し続けた。1970年ヴェニスビエンナーレにて「意味のメカニズム」を発表。1991年東京国立近代美術館にて個展。1997年グッゲンハイム美術館ソーホー（ニューヨーク）に

て個展。1995年に岐阜県にテーマパーク「養老天命反転地」を建設。2005年に東京三鷹に三鷹天命反転住宅～In Memory of Helen Keller～」を建造・販売。90年代後半から既存の美術の枠組を超えた建築分野での創作が活動の中心となっていた。2010年ニューヨークにて逝去。

三岸好太郎 (1903-1934)

1903年北海道生まれ。札幌第一中学校を卒業後1921年に上京。公募展等で油絵を発表し、評価を博す。このころ短い生涯の伴侶となる画家の節子と結婚し、創作をともにする。1930年以降、三岸の作品はシュルレアリスムに以降し、1934年に代表作となる連作「蝶と貝殻」を発表する。ヨーロッパのモダニズムの影響と東洋的な柔らかな静謐感を持ち合わせた革新的な表現は、作品が生まれて85年が経過した今もなお色褪せることがない。1934年旅行先の名古屋で急死、31歳であった。

中西夏之 (1935-2016)

1935年東京生まれ。東京都立日比谷高等学校卒業、東京藝術大学絵画科卒業。1962年、高松次郎、川仁宏らと「山手線事件」ハプニングを行う。1963年読売アンデパンダン展に「洗濯バサミは攪拌行動を主張する」を出展、同年高松次郎、赤瀬川原平と「ハイレッド・センター」を結成。前衛的かつコンセプチュアルなパフォーマンスを展開した。1960年代にはパフォーマンスとの交流も深く、暗黒舞踏派の舞台美術等も担当。一方作家が生涯に渡って活動の主軸と位置付けたペインティングの分野では1960年代の初期の実験的な絵画をスタートとして、50年以上に渡って哲学性を感じさせる力強い作品群を制作し、日本の絵画の潮流に大きな影響を残した。2016年、逝去。